異世界の英雄は艦と海を往く

榛猫

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時間軸の英雄、孫悟空は戦士である。

力の大会でジレンを降し、サイヤ人の生き残りであるブロリーをも退けた彼は、平和な日常のなかでも修行をしていたところ突如姿を消してしまった。

そんな彼は、ある日見知らぬ世界で目を覚ます

目次

英雄の目覚め。異界で目覚めしサイヤの戦士 ―― 1
二度目の目覚め。初会合は駆逐艦!? ―― 4
悟空に部下!?その名は駆逐艦朝潮！ ―― 7
初戦闘!?悟空ＶＳ深海棲艦 ―― 11
開戦だ！野菜ＶＳ海の亡霊！ ―― 18
新たなる艦娘！新たな仲間は駆逐艦！ ―― 22
提督業開始！仕事を覚えろ孫悟空！ ―― 28
悟空に救世主!?任務娘大淀!! ―― 32

英雄の目覚め。異界で目覚めしサイヤの戦士

ｓｉｄｅ界王（ナレーション）

とある山中にある畑。
その中で、一人の男の掛け声が響く。

「でりゃっ・・・ はぁっ！だりゃりゃりゃあっ!!」
男はまるで相手がいるかのように虚空を攻撃を繰り出している。

「だりゃっ！でりゃりゃりゃっ!!だぁりゃあっ!!」
男はしばらくそれを繰り返した後、一際大きな掛け声と共に大振りな素振りをした後、唐突に止まった。

「ふぅ・・・ よし、こんくれえにしてそろそろ仕事やんねえとな」
そう言うと、近くに止めてあった農機具に乗り込み途中であった畑の開拓を再開する。
男の名は孫悟空。
かつて、何度となく世界を救った英雄である
そんな彼は力の大会後も修行を怠ることなく続けていた。
今以上に強くなる為に、彼は自身の修行を継続している
そんな時、ふと悟空の目にあるものが写りこんだ。

「ん？・・・・・ なんだ？」
何故だか無性に気になった悟空は農機具を止め、ソレに近づいてそれを眺める。
そんな悟空の目の前には紫紺に輝く謎の球体が浮かんでおり、まるで悟空を招くように淡く輝いている。

「気は感じねえけど・・・ なんなんだこれ？」
疑問に思ったのか、悟空はその球体に手を伸ばした。

その手が球体に触れようとした瞬間……

グバァッ

突如球体が弾け、悟空を呑み込んだ。

「ッ!?しまっ…！！」

呑み込まれた悟空は抵抗する暇もなく捉えられ、その場から消えた。

消えた悟空と共に浮かんでいた紫紺の球体も消えており、後には悟空が乗っていた農機具だけが、ひっそりと取り残されているだけだった。

◇◆◇◆◇sidechange◆◇◆◇◆

――せ――

……？なんだ？

――ませ――ろ――

なんかの話し声みてえだ…　それもオラの聞いたことある声だ……

――覚ませ――おめえにはやらなきゃなんねえことがあるんだ――

やんなきゃなんねえこと…？っつかおめえはいったい…

――オラのことはいいだろ？ホラ、もう時間だ――

時間…？

そう聞き返そうとした時、その声の気配は薄くなり始めた。

なっ、何が起こってんだ!?オラもう訳わかんねえぞ……

オラの混乱を知ってか知らずか、その気配はさらに薄くなり、やが

て完全に消えちまった。
それに混乱する暇もなく、今度はオラ自身の身体が消え始めた。
なっ・・・ 身体が・・・ !?どういうことだこりゃあ・・・ !!
身体を動かそうにもまるで超能力で固められちまったみてえにピクリとも動かねえ・・・・・
ろくな抵抗も出来ずに、オラはその場から完全に消しさられちまった・・・・・・

二度目の目覚め。初会合は駆逐艦!?

ｓｉｄｅナレーション（界王）

「……ん…」

謎の空間から消された悟空は、別の空間で目を覚ました。

「なんだ?ここ…」

寝惚けた頭で起き上がり、辺りを見回す。

「…ん?部屋…だよな?なんでオラこんなとこにいんだ?」

そこは悟空の見覚えのない部屋の中だった。

「……なんもねえ、いってえなんの部屋なんだ?」

悟空の言葉通り、部屋の中には何も無い。

強いて言うならミカンと書かれた箱がひとつ置いてあるだけだ

「ん?なんだコレ…」

ふと悟空が見つけたのは、箱の上に置いてある数枚の紙だった。

悟空はそれに近づき手に取って眺める。

「んー……け、けん…ぞう?どういうことなんだ?」

目を細めて覗き込むが、分からないものは分からない。

しばらくその紙と睨み合いを続けている悟空に、不意に声が掛けられる

「司令官、どうかなさいましたか?」

「んっ…!?」

不意のその声に悟空は慌てて振り向く。

そこには黒い髪を肩より下まで伸ばした幼い少女が不思議そうな顔をして立っていた。

「おめえ、いったい誰だ？」

「・・・？自己紹介をご所望ですか？私は朝潮型一番艦の朝潮です。司令官！」

「へ？あ・・・あさがお・・・？」

「いえ、アサガオではなく、朝潮です。司令官」

どうやらこの少女は朝潮というらしい。

「おめえアサシオっちゅうんだな？オラ、孫悟空だ。よろしくな」

「ええ、存じております。孫司令官」

「・・・？なあ、そのシレイカンってなんだ？オラそんな名前じゃねえぞ」

「はい！孫司令官」

「いや、だからさ・・・・・・」

流石の悟空も苦笑いを浮かべるしかないようだ・・・・・・。

「・・・？司令官が仰ることが分かり兼ねるのですが・・・」

「えっとよ、オラ、そのシレイカンって名前じゃねえからさ・・・それはやめてくんねえかな？」

「・・・???では、なんとお呼びすればよろしいですか？」

自身のことを朝潮と呼んだ少女は不思議そうに首を傾げる。

「悟空でも孫でも好きなようにおめえの好きに呼んでくれ」

「！・・・ 名前で呼べというのですか言うのですか!?そ、それは出来ません!!」

「いや、けど落ち着かねえんだって・・・ だからよ、ダメか？」

「・・・・・ 分かりました。司令官がそこまで仰るのなら、悟空さんと呼ばせてもらいます。それでよろしいですか？」

「あぁ、サンキューアサシオ!!」

「・・・・・ 何だか呼び方に違和感がありますが・・・。いえ、感謝されるようなことではありません！司令・・・ 悟空さんの命令ですので！」

悟空の呼び方に複雑そうにしながらもそう答える朝潮と呼ばれた少女は真面目に答える。

「ん？オラ別に命令なんてしてねえぞ？」

「えっ・・・ 先程のあれは命令ではなかったのですか？」

「ちげえよ、オラそういうんは好きじゃねえ」

「・・・・・ では、さっきのはいったい」

そんな不毛な会話は悟空の腹がなるまで続くのだった・・・・・

はてさて、これからどうなりますことやら・・・・・

悟空に部下!?その名は駆逐艦朝潮！

ｓｉｄｅ界王（ナレーション）

「んー…」

「…？どうかなさいましたか？司令官」

珍しく何かを悩む悟空に、朝潮と呼ばれた少女が問い掛ける。

悟空は尚も何かを悩みながら口を開く

「うーん… いやよ、オラどうしてこんなとこに来ちまったのかってよ…」

オブラートに包みもせず率直に悩みを打ち明ける悟空。

「どうして… ??司れ… 失礼しました！悟空さんはここの提督になるために来たのではないのですか？」

「テイトク… なんだそれ？」

聞き覚えのない単語に悟空は首を傾げる

「… ！まさか、何も知らずにここに来られたのですか!?」

「いっ… ？あ、あぁ… 気づいたらオラここにいたからなんもわかんねえんだ」

「気づいたら… ？では、大本営に出向いたことは… ？」

「… ？なんだ？そのダイホンエイって…。それ食えんのか？」

「なっ… !?」

悟空から帰ってきたまさかの返事に朝潮は驚愕とする。

大本営に出向いたことがないなどと言われれば尚更だ……。

「い、いえ… 大本営は食べ物ではありません。悟空さん」

「ん?なんだ、そうなんか」

少しガッカリしたように肩を落とす悟空に朝潮は更に困惑を隠せない。

「シ… 悟空さん、つかぬ事をお聞きしますが…」

「ん?どうかしたんか?」

「悟空さんは… 艦娘… という名前に聞き覚えは?」

「… カンムス… んー… 聞いたことねえなぁ… 宇宙人みてえな奴か?」

その言葉に更に絶句する。

ま、まさか… いえ、けど!

「で、では… 深海棲艦というのは…」

「シンカイセーカン?それなんだ?それも宇宙人か?」

「ぐうっ… 救助中に攻撃なんて… 卑怯な!」

まるで最後のような台詞を呟き、朝潮は遂に倒れてしまった。

「いいっ… !?どうしたんだアサシオ!!しっかりしろぉ!!!」

「ぐっ… ご… 悟空さん…。どうやら私はここまでのようです… 後のことは… 頼みます…」

その言葉を最後に、朝潮は力なく頭を垂れてしまう。

「ッ!?・・・ アサシオ!アサシオオオオオオッ!!・・・ ッ!!許さねえ・・・ よくもっ・・・ よくもぉっ・・・ !!」

「オレは怒ったぞぉ・・・ ッ!!シンカイィィ――ッ!!」

悟空も悟空であたかも超(スーパー)サイヤ人に覚醒した時の台詞を口走り、怒りに打ち震えて叫ぶ。

何気にこの二人、ノリノリである。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

そんな茶番からしばらくして・・・・・・。

「んじゃあ、朝潮はオラのブカっちゅう奴なんだな?」

「はい、そうですね」

「んで、オラやおめえたちカンムス?の敵はその深海セイカン・・・ で、良いんだな?」

「ええ、その通りです!悟空さん!」

朝潮からここの説明を聞いた悟空は自身が理解出来たことを確認する為に問い返していた。

朝潮もすっかり名前呼びに慣れたようでハキハキとその問い掛けに答えている。

「そっか、んじゃもう一個聞いていいか?」

「はい、なんでしょうか?」

「そいつらってよ、強えんか？」

「え？そうですね、艦種にも寄りますが、奴らはかなり手強いです」

「そっかぁ、強えんかぁ！そんなヤツらと戦えるなんてオラすっげぇワクワクしてきたぞ!!」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

それを聞いていた悟空の顔はまるで楽しみで仕方がないことワクワクした子供のようだったと後に朝潮は供述しており……。

初戦闘!?悟空ＶＳ深海棲艦

ｓｉｄｅナレーション（界王）

「ふっ・・・ ふっ・・・ ふんっ・・・ ！」

まだ日の昇る前の暗い部屋の中、そんな声が聞こえてくる。

そんな声と共にポタポタと微かな水音も聞こえている。

そんな二つの音を出している張本人にはといえば・・・・・・。

「ふぅ・・・。 とりあえずこんなとこにしとくかぁ！」

汗を全身から滴り落としながら立ち上がる、半裸の孫悟空である。

と、そこに・・・・・・

「シレ・・・ ンンッ!!悟空さん！もうすぐ起きてください！直に起床の時間です・・・ よ・・・」

そう言って部屋へと入ってきた悟空の部下である駆逐艦の艦娘『朝潮』は眼前に飛び込んできたその光景を目の当たりにして言葉を失ったように閉ざす。

心なしかその顔が赤くなっているようにも見える。

しかし悟空見られているはと言えば・・・・・・。

「ん？よう！アサシオ、おめえももう起きたんか？早えんだなぁ」

「し、司令官!!な、なんて破廉恥な格好をしているのですか!!す、すぐに服を着てください!!」

何を気にした風もなく平然と振り向く悟空を見て朝潮は慌てて言葉を重ねだす。

その顔は諸に悟空の半裸を見てしまい耳まで真っ赤に染まっている。

「ハレンチ・・・ ？いや、けどさ・・・ 腹筋してたら汗かいちまってよ、こ

のまま着ちまったらベタベタして気持ち悪りいんだよ」

「だ、だったら早くお風呂に入って汗を流してきてください!!」

「ん?こんなの拭いときゃ乾「早く行ってきてください!!」お、おぉ・・・」

朝潮の勢いに押されるように、悟空は入渠ドックへと向かうのだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

そんな早朝の一件から数時間後。

「シレ・・・ 悟空さん!今日はどうなさいますか?」

執務室にて朝潮は提督服を着用した悟空に尋ねる。

しかし聞かれた当の悟空はといえば・・・・・

「なあ、アサシオ。オラこれ着てなきゃダメなんか?」

全く見当違いな事を聞き返している。

「はい!提督たるもの!常に威厳あれ!です!よくお似合いですよ?悟空さん」

「そっか・・・ ?けどオラ、道着のが着てえよ・・・」

「道着・・ ですか?せめて提督のお仕事をされる時だけでもいいのでそれを着ていてください」

「うーん・・・ ま、いっか!」

朝潮の言葉に渋々といった様子で納得した様子の悟空。
……　まあ、道着を着用して勤める提督なんてものの方が想像が難しいのだが……。

「それで、司令官!どうなさいますか?」
そして先程のやり取りをなかったもののようにもう一度問いかける朝潮。
この娘、意外とやるようである。

「んー…　そもそもそのテイトクって奴は何をすりゃいいんだ?オラそんなことしたことねえから分かんねえぞ」

「やること…　ですか、そうですね…　基本的には書類整理…　でしょうか」
その言葉に悟空は不思議そうに首を傾げる

「なあ、そのショルイセイリってなにすんだ?」

「えっと…　そうですね、説明するよりも見てもらった方が早いですね。悟空さん、こちらを見てください」
そう言うと一枚の用紙を渡す朝潮。

「ん?なんだこれ、何か書いてある?えーっと…　?」
それを受け取り書類を睨み出す悟空。

「……」
数分間たっぷり睨み合った後、力が抜けたように脱力した。

「アサシオ…　悪りい、全然読めねえぞ…」

「仕方ないですね…　どれどれ?艦娘を建造せよ…　と書いてありま

すね」
　特に気にした様子もなく、悟空から書類を受け取った朝潮はその書類の文面を読み上げた。
「ケンゾウ…　ってなんだ？」
「はい、ケンゾウとはですね、文字通り、資材を投入して新たに艦娘を作り出すことです。悟空さん！」
　しかし朝潮の説明にも悟空はよく分かっていないのか、不思議そうに首を傾げている。
「うーん、よくわかんねえぞ…　他になんかねえんか？ほら！昨日言ってたシンカイセイカンってやつと戦うとかさ!!」
「…　？出現ですか？出来ますけど、戦いに行くのは私ですよ？」
「へっ…　？オ、オラは戦えねえんか？」
　まさかの言葉に悟空が驚きの声を上げる。
「いえ、戦えない…　というよりは人類の攻撃が効かないんです。昨日も説明した通り、深海棲艦は私達艦娘の攻撃でしか倒せません…　って、聞いてますか？シレ…　悟空さん」
「ん？あぁ、聞いてっぞ、けどよ、おめえ達の攻撃が効くんならオラの攻撃も効くかもしんねえじゃねえか！やってみなくちゃ分からねえ！」
「いえ、だからですね…」
「よーし！そうと決まればすぐ行こう!!いやー！オラワクワクが止まらねえぞ!!」

「ちょっ・・・ 悟空さん!?私の話を聞いてくださーい!!」
行く気満々の悟空は朝潮の手を引き執務室を離れる。
最早朝潮の言葉は、悟空の耳には聞こえていないようである・・・・・・。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

出撃ターミナルの外。
駆逐艦『朝潮』は困惑の極みに突入していた。
「・・・・・・・ えっと、悟空さん。ひとつ聞いてもよろしいですか?」
「ん?なんだ?」
「どうして司令官・・・ いえ、悟空さんは、その・・・ 宙に浮いているのでしょう?」
「なんでって舞空術使って飛んでからだ」
平然と答える悟空の言葉に朝潮は更に困惑を極める。
「そ、そうですか・・・ では、その『ブクウジュツ』・・・ ?というのはどうやってやっているのですか?」
「どうやってって・・・ 気をコントロールしてるだけだぞ」
「・・・・・・・ ええ・・・」
最早説明にもなっていない悟空の言葉にさしもの朝潮も頭を抱える。
当然といえば当然だろう。朝潮や艦娘の中では、人は空を飛んだり

はしない。気・・・ という概念は艦だった頃に聞いた記憶があるが、見たことなどあるわけがないのだから・・・・・・。

「もう、何が何だか分かりません・・・」

「そんな不思議なことか？オラから見りゃおめえの方が不思議だぞ。それ、どうやって水の上に立ってんだ？」

悟空の疑問も最もではあるが、今は置いておこう。

「それは艤装が・・・ いえ、それよりも早く行きましょう。いつまでもここにいても仕方ありませんから」

「あぁ！」

こうして、朝潮は海の上を、そして悟空はその後を追うように空を飛び大海原へと出撃して行くのだった

「ギャガアアアアアアッ!?!?」

「だりゃっ!!だりゃりゃりゃ!!!だらぁッ!!」

「・・・・・・ 人間ってなんでしょうか」

しばらくして海の上では一人の人間の手によってしばき倒されている駆逐型の深海棲艦を見て遠い目をしている朝潮の姿があったという。

後に、朝潮の中で様子を見ていた装備妖精さんは語る。

『あんなのはにんげんじゃないです!!いまのていとくってみんなあんななのですか!!!!?』

開戦だ！野菜ＶＳ海の亡霊！

ｓｉｄｅナレーション（界王）

二人が出撃してまず向かったのは鎮守府より少し離れた『鎮守府正面海域』であった。

「ッ！シ・・・ 悟空さん！敵影を確認しました！」

「あぁ、オラにも見えてる。アイツがアサシオの言ってた深海棲艦か。確かに禍々しい気を感じる・・・」

何時になく真剣な声音の悟空。

深海棲艦も二人の存在に気がついたのか海面から大きく飛び上がり吠えた。

「グギャアアアアアッ!!」

一通り吠えると再び海中へと消えていく深海棲艦。後には大きな水柱が上がっている。

油断なく構える艤装を構える二人。

「アイツは・・・ 駆逐イ級・・・。悟空さん、ここは私「いくぞ!!だあああああああっ!!」が・・・。えっ・・・ ？」

朝潮が何かを言う前に悟空がイ級目掛けて飛び出していく。

これには朝潮も言葉を失う。

「ちょっ・・・ 司令官!?下がってください!!」

すぐに我に却って慌てて呼びかけるが、悟空の耳には届いていないようでズンズンとイ級へと突っ込んでいく。

「グギッ・・・ !!グギャアアアアアッ!!」

イ級も接近してくる悟空に気が付き砲弾を悟空目掛けて撃ち放つ。

悟空目掛けて放たれる怨念が纏わり付いたその砲弾は真っ直ぐに悟空に向かって突き進んでいく。

「司令官っ!!」

そして悟空に砲弾が直撃しようとしたその時だった。

「司令官っ!!」

朝潮が悲痛な叫びをあげる・・・。しかし

《ピシュンッ!!》

砲弾の直撃の寸前、風を切るような音と共に、悟空の姿が一瞬消えたのだ。

その消えた瞬間に砲弾は悟空を通り過ぎ、彼方へと飛んでいき、遠くくらい海へと着水し、大きな水柱を立てた。

「えっ・・・」

「グギャッ!?」

これには朝潮もイ級も驚きの声をあげる。

それを見逃す悟空ではない。

「はっ!!」

瞬時に海中へと潜っていく悟空。

「グギャッ!!グギャアアアアアッ!!」

慌てて辺りを見回すイ級だったが、突如その身体が浮上を始めた。

「グギャッ!?グギャギャアアアッ!!」

突然の事に慌てて暴れるイ級だが、浮上していく身体は止まらない。

やがてイ級の身体が完全に海面から出たところで悟空がその下か

ら出てくる。

「よっと！下がガラ空きだ！だりゃっ!!」

両手で持ち上げていたイ級を、軽々と更に上空へと蹴り飛ばし、すぐ様その尾のような先端を掴んで空中で捕らえる。そしてそのまま……

「だあぁぁっ!!でりゃあぁぁっ!!」

自身の体を軸に勢い良くイ級の身体をジャイアントスイングし始めた。

空中で振り回されるなどいう経験がないイ級もこれには溜まったものではないらしく……

「グギャッ!!グギャッ!!グギャアアアアッ!!」

必死に叫びながらその身体をクネクネと捩らせ逃げようとしている。

だが、ガッシリと掴んでいる悟空からは逃れられるはずもなく、ただだされるがままで振り回されているしかない。

「でえぇぇぇっ… りゃあぁぁっ!!」

しばらく振り回した後、一際大きな掛け声をあげてそのイ級の身体を投げ飛ばした。

「グギャッ!?グッギャアアアアアアッ!!!????」

最早可哀想になる勢いで吹っ飛んでいくイ級。

その勢いは先程イ級自身が悟空に放った砲弾のような速度で飛んでいく。

飛ばされたイ級はやがて落ちた先にあった岩に激突し、その身体を粉微塵に爆散させたのであった……。

これをずっと見ていた朝潮は後に……。

「あれは深海棲艦が可哀想に見えてきてしまいました…。もう最後の方はあの声が泣き喚いているようにしか聞こえなくて見ていられませんでした…」

と語っている。

そしてそれをした本人はというと……

「んー… これで終わりかぁ… もうちっと強えかと思ってたんだけどな…」

と、不満げな表情をしていた。

朝潮はそれを聞きながらイ級の爆散した後に落ちていた水晶のようなものを疲れた表情で拾っていたという。

「…… さあ、悟空さん、とりあえず帰りましょう」

「ん?あぁ!」

新たなる艦娘！新たな仲間は駆逐艦！

ｓｉｄｅナレーション（界王）

「なあ、アサシオそういえばなんだけどよ」
鎮守府に帰投の最中、朝潮の横を飛んでいた悟空がふと朝潮に声をかける。

「はい？なんでしょうかシレ・・・ 悟空さん」

「さっきの奴倒したときにさ、こんなの拾ったんだけど、コレ何か知ってっか？」
そう言って悟空は懐から淡く輝く水晶を取り出し朝潮に見せる。

「これは・・・ 悟空さん、何処でこれを？」

「へへへっ奴を倒したすぐ側さ、光ってたから拾ったんだ」
自慢気に話す悟空だが、朝潮はその水晶を見つめる。

「悟空さん、これは恐らくですが、記憶の水晶という物でしょう」

「ん？キオクの・・・？」

「記憶の水晶です。悟空さん」

「お、おぉ・・・ その記憶のスイショウ？ってなんだ？」

「私も聞いた話でしか知りませんが、どうやら艦娘の記憶が内封されているとか・・・」

「・・・・・ ??えっと、つまりどういうことなんだ？」

「えっと・・・ ですね、つまりこの中には私と同じ艦娘が眠っていると言うことです！はい！」
今までの経験から凄くバッサリとした説明を始める辺り、朝潮も悟空との付き合い方に慣れ始めておるのかもしれん・・・・・・。
「ともかく悟空さん！鎮守府に帰投しましたら工廠に向かうことをオススメします！」
「コウショウ・・・ ？そんなとこあったんか？オラ知らねえぞ」
「執務室で説明したではないですか！・・・ もう、分かりました。私も同行します」
「ホントか!!サンキュー!!」
もはや諦めたように朝潮は肩を落として力無くて微笑むしか出来なかった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

無事に鎮守府に帰投した朝潮は艤装を解き、工廠へと向かっていた。
後には地面に降り立った悟空が続いている。
「シ・・・ 悟空さん、これから行く工廠はよくお世話になる所なんですから覚えてくださいね？」
「お、おう・・・ そんなに大事なとこなんか？」
「勿論です！これから激しくなっていくはずの戦いに私だけしかいな

いと言うのは心許なさ過ぎます!!」

「わ、分かったよ・・・ 覚えるって・・・」

そんな朝潮の迫力に若干押されつつも悟空は工廠へと向かって行く。

「ここですよ」

少し歩いたところで朝潮が不意に立ち止まる。

そこには工場のような建物が建っていた。

「へぇ〜!ここがおめえの言ってたコショウなんかぁ!!」

「悟空さん、そんな調味料みたいな名前ではなく工廠です。着いてきてください」

そう言うと朝潮は中へと入っていく。悟空もその後を追うように中へと入って行くのだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「失礼します!明石さん、いらっしゃいますか!」

中に入り朝潮が奥にそう呼びかける。

「・・・ ?誰に話しかけてんだ?」

急に暗闇に向けて声を掛けだした朝潮に悟空が不思議そうに声を掛ける。

「この工廠の担当者の方を呼んだんです。いるはずなのですが・・・」

「たんとうしゃ・・・ ?んっ!?」

聞き覚えのない単語に疑問を覚えた悟空であったが、何かを察知したのか奥の方を睨みつける。
すると、奥の方から、桃色の髪をおさげ風に横髪で纏め、水色のシャツの上にセーラー服を着込み、腰回りの露出したスカートのようなものを穿いた少女が出てきた。

「はいはーい、遅くなっちゃってごめんねー、どうしたの朝潮ちゃん、……と、どちら様？」
少女が悟空に気が付き首を傾げる。

「この方は新しくこの鎮守府に着任した提督の孫悟空さんです」

「オッス！オラ悟空だ、よろしくな！」
少女は一瞬呆けたような顔をするがすぐに状況を理解したのかすぐに動き出した。

「あ、あぁ～！新しく着任した提督の方だったんですね！軍服を着てないから誰かと思いましたよ…。コホンッ…。初めまして、私は工作艦の明石です。大本営からこの鎮守府の工廠を任されてます。よろしくお願いしますね」

「おぉ、よろしくなアカシ！」
そう言ってにこやかに握手を交わす二人。
少しして手を離した明石は思い出したように口を開いた。

「そういえば今日はどうしたの？着任の挨拶にきただけ？」

「いえ、それもあるのですが、実は見て欲しいものがあって…」
明石の言葉に少し口篭りながら朝潮が答える。

「…？見せたいもの？」

「はい、悟空さん。アレを明石さんに」

「ん？コレか？」

朝潮の言葉に悟空が先程の記憶の水晶を取り出す。

「っ！それは…」

悟空の取りだした物を見て、明石が驚きの声を上げる。

「……　実は先程、提督と二人で出撃したのですが、その時に提督がコレを拾ったらしくて…」

「へぇ～…　えっ？今なんて？凄く不穏な単語が聞こえた気がしたんだけど…」

「え？ですので出撃した時に…」

「その前よ、なんて言った…　？」

「提督と二人で出撃した時…　ですか？」

「それよそれ！提督と二人でってどういうこと!?」

「提督が深海棲艦と戦いたがっていたので…」

「提督が!?えっ…　どういうこと？」

「コレも提督が駆逐イ級を倒した時に見つけた物です」

「訳が分からないんだけど…　!?!?」

「大して強くなかったからちっと拍子抜けだったぞ・・・ もっと強え奴と戦いてえ」

「強くない!?強くなかった!?えっ・・・ ホントにどういうことなのコレェ・・・!!!!!!」

その後しばらくの間、明石の叫びが工廠の中に響き渡っていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「という訳で、この水晶の復元をお願いします」

「あー・・・ うん、分かった・・・。なんか色々着いていけてないけど・・・・・・」

そうして差し出された水晶を受け取り、明石はフラフラと疲れたように再び工廠の奥へと消えていった。

「・・・・・・ なあ、なんでアカシの奴、あんなになってたんだ?」

「・・・・・・ だいたい司令官のせいだと思いますよ・・・ ?」

「いっ・・・ !?」

そんなことを話している二人のもとに、明石が再び戻ってきた。

「・・・・・・ お待たせしました。復元が終わりましたよ、ほら、おいで」

そう言って明石が裏に向けて呼びかけると、奥からセーラー服のようなもの纏った少女が出てきて言った。

「は、初めまして・・・ あたし、文月っていうの。よろしくぅ~」

これがこの鎮守府で二人目となる艦娘の誕生であった。

提督業開始！仕事を覚えろ孫悟空！

ｓｉｄｅナレーション（界王）

「にしても不思議なもんだな・・・ おめえあの石ころにどうやって入ってたんだ？」

新たに仲間となった、駆逐艦の少女『文月』に悟空はそんな疑問を投げかける。

「えっとぉ～それはねぇ～・・・ って、どうしてしれーかんさん、わたしのおでこをコンコンするのぉ～？」

・・・ どうやら悟空は、文月があの水晶の中に入っていると勘違いしたらしく、答えようとしている文月に近づき軽く額をコツコツと叩いていた。

「んー・・・ あの石から出てきたんならもっと硬い（かてぇ）かと思ったんだけど・・・ そんな固くねえぞ・・・」

「えええ～・・・」

「いや水晶から出てきたからって硬いわけではないですからね!?!?」

それに盛大に困惑する駆逐艦『文月』。もうなんと言ったらいいのか分からないと言った表情である・・・・・・。

そしてその悟空のボケに、勢いよくツッコミを入れる朝潮。

まだまだ悟空との接し方を掴み切れていないようである・・・・・・。

◆◇◆◇◆閑話休題（そんなこんなで）◇◆◇◆◇

「さて、そろそろ執務室に戻りましょう悟空さん!!」

「ん?あぁ、そうだな!」

「やっと戻るんだぁ・・・。なんだかどっと疲れたよぉ~」

口調こそのんびりとしたものだが、文月の言葉からはとても疲れが感じられる。

それも当然だろう、つい先程まで、水晶(悟空の勘違い)の話をしていたのだから・・・・・・

入りたてにこんなことがあれば疲れもするだろう・・・・・・。

そんな文月を差し置いて、二人は執務室へと歩き始め、少し離れたところで声を掛けてくる。

「?・・・ 何してんだ文月、そんなとこにいねえで行こうぜ」

「あ、待ってよぉ~!!」

文月もそれに気が付き急いで後を追いかけていくのだった。

◆◇◆◇◆閑話休題(場面は変わり)◇◆◇◆◇

「また戻ってきちまったな、この部屋・・・」

執務室へと戻ってきた悟空は床に胡座をかいて座りこむ。

「シレ・・・ 悟空さん、床に座るなんてはしたないですよ!!」

「へっ・・・ そうなんか?」

「あはは…　けど、仕方ないんじゃないかなぁ～…。このお部屋、これしかないんだし…」
　そう話す文月が見るのは、申し訳程度に一つだけ置かれた『みかん』とが書かれた段ボール箱である。
　これでは確かにはしたないと言えど仕方のないことであろう……。

「うっ…　ですが…」

「まあいいじゃねえか！ないもんは仕方ねえんだし、床に座っててもよ!!」

「そうだよぉ～、ね？朝潮ちゃん」
　能天気な悟空の言葉に文月が追撃を掛ける。

「うっ…　わ、分かりました…。もう少しまともな家具を手に入れるまでは我慢します…」
　ここで遂に朝潮も折れてしまうのだった……。

◆◇◆◇◆閑話休題（そんなこんなで）◇◆◇◆◇

「さあ、司令官！そろそろ任務を片付けましょう!!」
　執務室で寛いでいた時、唐突に朝潮が声を上げた。

「へっ・・・ ?にんむ・・・ ??」
しかし悟空は何も分かっていなさそうにキョトンとしている。

「出撃する前に説明しました、あの任務です」
そう言って朝潮が一枚の紙を取り出し見せる。

「いいっ・・・ !?それやるんか!?いや、でもよ・・・」

「でももヘチマもないです!!さあ、やりましょう!!」
ジリジリと迫る朝潮にタジタジの悟空・・・・・・。

「・・・ っ!!お、オラちっと海に行ってくる!!」
そう言って逃げ出そうとドアに向かって駆け出すが・・・・・・

「しれ~か~んさ~ん・・・

お仕事・・・ ちゃんとやらなきゃダメだよ?」

「・・・・・ っ!は、はい!!」
・・・・・・・悟空よ、女は怖いな

悟空に救世主!?任務娘大淀!!

ｓｉｄｅナレーション（界王）

「ん～・・・これどうすりゃいいんだ？」

文月の説得（恐怖）から数分後、悟空は司令室机（みかん箱）に向かい頭を悩ませていた。

「――――かんたいをへんせい？せよとか、――――を三回行えって、何すりゃいいかわっかんねえぞ・・・」

そう、先程から悟空の頭を悩ませているのは書類である。

体を動かす方が得意な悟空にはこの作業は専門外なのだった。

文月や朝潮に言われた手前、やらない訳にもいかず、悟空は書類を睨みつけながら考えていた。

「・・・・・・・・・・あー!!駄目だ、どんだけ読んでもぜんぜ分からねえ・・・」

遂に音を上げ床に寝転んでしまう。

しかしそれは唐突に終わりを告げる・・・・・・。

「何かお困りですか？提督」

寝転ぶ悟空の眼前に、人影が写りこんだ。

「!!・・・だ、誰だおめえ!!」

気配すら気づかせずに話しかけてきたその人影に慌てて声をかける。

すると女性は合点がいったようにポンと手を叩くと、軽く微笑みを浮かべて自己紹介を始めた。

「あぁ、これは失礼しました。提督、私は大本営より派遣されました任務担当の大淀と申します。以後、お見知り置きくださいね」

そう言うと、眼鏡の淵を軽く指で持ち上げる任務娘『大淀』。

「そうなんか、オラ孫悟空だ、よろしくな！おおよど！」

「はい！」

相変わらずの悟空の舌足らずな呼び方にも眉ひとつ顰めず、笑んだまま返事をしてくれる大淀。

流石に駆逐艦達よりも大きいだけあって、対応も大人である。

……何気に、この鎮守府の中で悟空を除くけば、一番の年上かもしれない……。

そうこうしていると、大淀が話題を変えるように口を開いた。

「ところで、提督は何をしていたのですか？」

仕えるべき主人が床に寝そべっていたのが気になったか、そう問いかけてくる。

「へっ…？てーとくって誰の事だ？オラ孫悟空だ！っとと、これがよ… オラ全然分かんなくてよ……」

「はい存じていますよ？ふむふむ、見せてもらってよろしいですか？」

「えっ… あ、おぉ…」

言われるがままにやりかけの書類を見せる悟空。

そして大淀がその書類を受け取り見始める。

「あぁ、編成の任務と建造依頼の任務ですね。何が分からないのですか？」

「え、えっと… へん… ？けん… ？」

「あ… はい、分かりました。こちらは私がやっておきますから提督

は工廠で建造を依頼してきてもらえますか？工廠の場所は分かりますよね？」

「へっ・・・ ？こうしょう？」

「・・・・・・・ 分かりました、では提督、朝潮さんを探してください。見つけたら朝潮さんと一緒に工廠へ向かってください。朝潮さんには工廠へ行きたいと言えば伝わるはずですから」

「！・・・ 分かった！サンキュー！おおよど！」

そう言って執務室より走っていく提督の男・・・・・・・・

工廠の場所すらも分かっていなさそうな悟空・・・・・・。

この男、ホントに提督としてやっていけるのだろうか・・・・・・

はてさて、これからどうなりますことやら・・・・・